

《complete the educational reform》

競争から共創、そして 響創の教育改革へ！

1. 通知票の所見指導を通して若手教員の資質・適性を育む

一学期の終業式を間近に控え、新規採用教員を含む若手教員にとって、通知票の作成、特に所見欄の記入という悩み多い時期が近づいてきた。成績を含め、子供の学校生活の様子を適切な言葉、保護者に理解してもらえる言葉に表して記入することは、ベテラン教員にとっても頭を悩ませる大仕事である。

私は、学年主任、教頭、校長の頃、所見欄の表記について徹底的に指導をしてきた。

所見を読めば、① 教員がどの程度子供理解に努めてきたか。

② 子供同士の間関係が特定の子供を中心に描かれていないか。

③ 学習について、個々の子供の状況に応じた指導、評価の視点を持っているか。（評価が一面的になっていないか。）

④ 特定の教科の評価のみに偏っていないか。

⑤ 子供一人一人が頑張ってきた点と課題を明確に指摘し、その解決策についてわかりやすく伝え、子供の努力すべき点、保護者・教師の役割を明らかにしているか。

⑥ 担任として何を子供や保護者に伝えたいのか、分かりづらい表現、誤解を生みやすい表現になっていないか。

⑦ 人権上不適切な文言等が使われていないか。

⑧ その他

等、教師としての個性・適性を読み取ることができる。

これらは学校生活の中で、学習指導の中で、友だち関係の中で常に意識し、普段から捉えておかなければならない事項であるが、この通知票作成の時期になって初めて下書きに取り組み、一般的表現で終わらせる教員が多いのも事実である。若い、経験の少ない時期は大変な仕事であるし、自分では中々捉えにくい面（自分自身の問題である。）もあるが故に、年3回の通知票作成の時期を捉え、的確に指導を重ねる事が大事である。

このような指導を初年度、1学期、2学期、3学期と積み重ねることによって、間違いなく若手教員の（ベテラン層の教員にも必要）授業観、子供を見る観察眼、子供や保護者の理解や共感を生む表現ができるようになっていく成長の過程を見てきた。若手教員が益々増える状況の中で、若手を育てる視点として、適切で的確な所見欄の指導をお願いしたい。

2. スクール・インターンシップについて

5年越しでようやく実現した東京学芸大学の「スクールインターンシップ」が暗礁に乗り上げている。昨年度末の学内での説明会には、500人を超える学生が説明会に参加したということで、幸先よいスタートが切れると判断したことは間違いない。しかし、蓋を開けてみたら僅かに2名の学生しか申し込みがなかったということで、しかも小平は希望者なしということで大学側から謝罪のメールが届いた。鳴り物入りでスタートし、学校側にもその受け入れをお願いし、大きな期待が持たれていただけに残念でならない。

大学に出向いたときにその要因を探ってみたら、正直唖然としてしまった。希望する学生の単位取得のための物理的要因が全くといっていいほど解決されていない。言ってみれば、参加の手だてが施されていないといっている。後期に向けて早急に解決策を講じるようお願いしては見たが、殆ど年間を通した単位取得のためのカリキュラムができている現状から、今年度どこまで改善策が講じられるか、その様子を見てみたい。

3. 第4回「こだいらサミット」について

こだいら商工会主催による「こだいらサミット」も今年で4回目を迎えることになった。この2年は、「親と子の上手なつきあい方」をテーマに開催されたが、今年も同テーマの下、パートⅢとして「あなたはケイタイで悩んでいませんか？」の主題について小・中学生はもとより、保護者の皆さんからも作文を募集し、9月6日（土）にルネこだいら中ホールにおいて作文の発表とパネルディスカッションが展開されることになっている。昨年パネラーとして参加した小・中学生の日頃の考えや発表の内容、その姿勢が多く参加者に大きな感銘を与えたことは記憶に新しい。当日は、ディー・エヌ・エーカスタマーサービス部長の田中陽子氏の講演も予定されており、昨今話題になっている「子供に携帯を持たせる」ことについても、携帯社会の実態から、様々なお話が伺えるものと期待している。管理職はもとより、一般の先生方の参加も期待している。

尚、紹介のチラシ（本日各校1枚配布）や作文募集に関する案内については、商工会の方が各小・中学校を改めてお願いに訪問されるとのことである。協力をお願いしたい。

4. 「こだいら福祉のつどい」について

6月21日（土）午後1時より、小平市福祉会館市民ホールにおいて小平市社会福祉協議会による「第22回 こだいら福祉のつどい」が開催された。

第1部は、小平市社会福祉協議会や福祉活動への功労のあった方々への表彰状、並びに感謝状の贈呈式があり、大勢の被表彰者の皆さんが晴れがましい顔で参列されていた姿が印象的であった。同時に、これだけ大勢の皆さんが……と、小平市の福祉行政を支えていただいている皆さんの姿に、頼もしさを覚えたのも事実である。主任児童委員や民生委員・児童委員の皆さんは、学校経営協力者や学校支援ボランティアとしても日頃より学校経営にご協力いただいております、改めて感謝を申し上げる次第である。

引き続き第2部は、「心にしみる短歌入選作品発表」が行われた。

今年度は「思いやり」のテーマで募集をしたところ、一般の部には中学生を含む12

9作品が、児童の部には、2012作品が寄せられ、審査員もうれしい悲鳴をあげ、審査には大変苦勞したと伺っている。一般の部の9名の受賞者に、中学生6名が入選しており、子どもたちの中に確実に福祉の心が培われていることを実感した。

第3部は講演で、日テレ学院院長・元日本テレビアナウンサーの石川牧子さんによる「私の介護体験」の演題の下、石川さんご自身がご両親の介護と仕事を続けてこられた体験談が紹介された。その中で、別々に訪れた両親への介護を通して、何度か仕事を辞めようと考えたけれども、何故仕事を辞めずに、土・日だけ仙台に帰り、親の介護にあたったかという話の中で、特に印象に残ったのは、「両親は自分が仕事を辞めることを望んでいない。やめればきっと、自分の介護のために娘は大好きな仕事を辞めてしまったと、返って両親をつらい状況に追い込んでしまうと分かっていた。だから、大変だけど仕事も辞めず、休みもなく土・日仙台に通い続けた。」という言葉が印象的であった。

私の母も30年来、病院と特別養護老人ホームを行き来し、多くの皆さんにお世話になっているが、介護制度と親戚の介助に甘え、仕事を続けることができている現状に心から感謝している。ある時母に、「一人残されて特養に入っていることが寂しくないかい。」と訪ねたところ、「自分の好きなこと、やりたいことをやるように勧めたのは私だから、寂しくても我慢して頑張らなくちゃ。」と目に涙を浮かべながら語った母の姿が脳裏に焼き付いている。そうでなければ、九州の片田舎の古いしきたりの残る町で、家長の立場でありながら障害の重い母（視力1級障害、下半身不随、2年前には食道に管を直結し、流動食のみで命を永らえている。）を一人残し、東京で働いていることそのものが親不孝との誹りを免れない状況にあり、何時も「感謝」の二文字を忘れないように心に焼き付けてきた。

30代後半から、一人親家庭の家族のためのサマーキャンプ等の野外活動を企画し、開催したり、筋ジストロフィーの子供のための車いす登山や成人の重度の障害者のための温泉旅行やキャンプ、水泳教室等を企画・実施してきたのも、今できることを少しでもやりたい、恩返しをしたいという感謝の気持ちからである。校長職を拝命してからはさすがに自分が企画・実践する立場からは身を退いたが、今もって気持ちは変わらない。

超高齢社会と言われる現代の世の中。世界のどこの国にも見本や手本もない未体験ゾーンに突入した我が国では、社会保障の制度が必ずしも平等に行き渡っておらず、介護に掛かる家族の負担は重く、介護疲れから悲惨な事件が起こることも希ではない。社会保障制度は、その制度を必要としている全ての人に行き渡ってこそ、介護を負担と思うことも少なくなり、高齢者の皆さんも安心して老後を迎えることができ、障害があっても共に生きることのできる精神的に豊かな町が実現できると思っている。

まだまだ努力しなければならないことはたくさんある。

5. 学校支援地域本部事業について（6月に続いて）

文部科学省生涯学習政策局社会教育課の新規事業として「学校支援地域本部事業」がスタートした。（予算総額50億、全国1800カ所において実施）

6月の合同会議でも説明したように、この事業は、中学校区単位に「学校支援地域本

部」を置き、学校支援ボランティア（学生ボランティア・社会人ボランティア等）による「学習支援」「部活動指導」「校内の環境整備」「登下校を含んだ子供の安全確保」等、学校支援を目指した事業である。更に、学校とボランティアとの連絡調整等を行う「地域コーディネーター」を配置することとなっている。

前回も説明したように、小平市においては、コーディネーターを配置してある学校では各小・中学校独自に支援本部を置き、この事業の最大の目的である「教師の負担をできるだけ軽減し、教師が子供一人一人と向き合う時間を確保する」ことに活かしていきたいと考えている。と同時に、本事業を進めるに当たり改めて確認しておきたいことは、事業推進に伴い、子供にとっても、教師にとっても、授業支援者にとっても、お互いに認め合う効果が確認されることがこの事業の推進と継続に繋がる条件である。

これまでの経験から、次のような効果が考えられる。

*子供にとって

- ・ 学習の幅が広がり、深く学ぶきっかけづくりとなる。
- ・ ゲストティーチャーの導入は、子供に本物体験の機会を提供することになる。
- ・ 様々な人との出会いが、子供の人間性・社会性を育み、夢や希望を持たせることに繋がる。

*教師にとって

- ・ 子供の意欲・関心を引き出し、夢中にさせる学習の展開が期待できる。
- ・ 子供の課題に対し、より専門的に応える授業が展開できる。
- ・ 教師にとっても、専門性に触れ、指導の幅を広げることができる。

*授業支援者にとって

- ・ 子供と一緒にいるとエネルギーがもらえ、生き甲斐と元気が出市、楽しい。
- ・ 自分にも子供に教えることのできる充実感を味わえる。
- ・ 子供の柔軟な発想に刺激を受け、新たな視点に目を向けることができる。
- ・ 子供に教えることから、自分の仕事、自分自身を振り返ることができる。

6. その他

東京ガスの出前授業

今日午前中、6月に紹介のあった東京ガスの小学校での出前授業を参観する機会があった。内容がよく分かっている専門家なので、原理は難しくても、小学生の子供にもわかりやすくかみ砕いた平易な言葉で優しく話しかけ、子供の興味や関心を上手に引き出しておられた。子供にとっては、何よりも専門家の話を聞いたことと、わかりやすかったこと。学校では手に入れにくい資料や実験道具の提供があり、子供にとっては楽しい時間が過ごせたことと思う。

担当者の方から、今年は授業依頼の連絡も多くきているとの話があったが、子供の学習を豊かにし、経験、体験の機会を増やし、本物の学習に参加させる上からも、是非多くの学校で取り入れて欲しい。